

氏名	李 佳 炫
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 8870 号
学位授与年月日	平成 30 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	三島由紀夫作品における女性像—主体的人間像と支配力—

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	青柳 悦子
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	齋藤 一
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	馬場 美佳
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	吉原 ゆかり

## 論 文 の 要 旨

本論文は日本を代表する現代作家三島由紀夫について、これまであまり論じられてこなかった女性登場人物たちに着眼して読み直しをおこなうもので、とりわけ三島文学において女性たちが体現している「主体性」と「支配力」の様相を分析しその意味について探るものである。

本論文の構成は以下の通りである。

### 序章

第 1 章 三島文学における「怪物」的女性像——短編作品を中心に

第 2 章 三島文学における男性の世界と女性像——『禁色』論

第 3 章 三島文学における恋愛と女性像——『沈める瀧』論

第 4 章 三島文学における「自己改造」と女性像——『美德のよろめき』論

第 5 章 三島文学における「女中」と女性像——戯曲を中心に

### 結章

序章では、これまでの三島文学研究において男性中心主義的な偏りが顕著であったことを確認するとともに、近年のジェンダー論を踏まえた研究においても依然として男性人物たちが分析の対象となるか、男性人物に対する補助的な存在として女性人物が論じられるにすぎない傾向が強いことを指摘している。他方で三島文学において女性人物が重要な役割を果たす作品が少なくないことを押さえたうえで、女性たちに着眼することで主要作品と言われる長編小説のみならず短編や戯曲、あるいは大衆的な「中間小説」と分類される作品をも含めた全体的な視野から三島文学の核心について新たな見方が可能であることを素描し、本論文の研究作業の意義を明示している。

第1章では短編作品である「獅子」「葵上」「熱帯樹」「憂国」「女は占領されない」「鍵のかかる部屋」および中編小説の『女神』をとりあげ、これらの作品で描かれているきわめて特徴的な「怪物的」女性像が分析される。作品内で明確に「怪物的」と形容されることもあるこれらの作品の女性主人公たち（ないし中心的な役割を果たす女性人物たち）の多くが、強烈な個性をもち男性を翻弄したり計略にはめたりするという意味で「支配力」をもった存在であることを確認し、三島文学において一つの型を成していることを指摘する。同時にこうした「主体性」をもつ女性たちが、戦後の日本で主流となってきた「核家族」の枠内に位置づけられていることに着眼し、三島文学の女性像が「家庭」をめぐる作家の問題意識と深く関わっていることを指摘する。

第2章ではこれまで男性どうしの同性愛小説という観点から読まれてきた長編小説『禁色』をとりあげ、むしろここに描かれているのは男性と女性との関係であること、そして主要な二人の男性登場人物（老年の作家俊輔と美青年悠一）がいずれも女性に依存し、女性との相対的な関係のなかで自己を維持し、また新たな自己を発見する存在であることを析出している。とりわけ主要な三人の女性人物を分析し、男性たちと比較して強靱な精神力をもち自立した側面をみせる彼女たちの特質を明らかにする一方で、彼女たちが男女関係という枠組みの中でしか「主体性」を発揮しえないことを指摘する。ここから、制限された自由の保持者として描かれる女性たちが、まさに三島による近代的主体の掘り下げを可能にする文学的形象であることを論じている。

第3章では、戦後に隆盛をみた大衆的な軽い読み物である「中間小説」に分類される長編『沈める瀧』をとりあげる。そもそもこの作品には本格的な研究がこれまで存在しないが、ダム建設に関わる昇のみを主人公とみなす一般的な見方を転覆し、彼と「人工的恋愛」を試みる人妻頭子を中心人物として分析をおこなう。この作品でも男女関係の枠内でむしろ女性が強者として描かれていることを詳細な引用を通じて明らかにするとともに、三島が文学を通して男女の一对一の恋愛関係を執拗に描いたことに注意を喚起し、それゆえ三島にとって「中間小説」というジャンルが「純文学」と不可分な、重要な創作媒体であったことを論じている。

第4章では、「姦通小説」ブームのなかでベストセラーとなった長編『美德のよるめき』が三島文学の重要作品として再検討される。女性主人公節子は人工妊娠中絶を作品中で三回も繰り返すという特異な設定となっているが、これを三島自身が1950年代後半からおこなっていたボディビルディング等を通じた「自己改造」と照応させて論じる。精神と肉体の両面における陶冶という三島の理想を節子が作中で体現していることを分析するとともに、誰の理解をも求めず最終的に沈黙するヒロイン節子を、群衆のなかでの徹底した孤独という近代人特有のあり方の形象化として位置づけている。

第5章では、三島文学における戯曲の重要性を概観したうえで、戯曲作品ではとりわけ女性が主要な役割を果たすこと、とりわけ「女中」という人物類型が目立って用いられていることを指摘する。戦後の日本ではその呼称とともに主人一家に忠実に仕える住み込みの召使としての「女中」は過去のものとなっていたにもかかわらず、「女中」が中心人物とされている戯曲三作品が分析される。「女中」は「ただほど高いものはない」では主婦以上に家政を担う家庭の内なる支配者であり、『十日の菊』では家のなかで人々の運命を左右し、『朱雀家の滅亡』では一家の守り神をも凌駕する超越的な権威をみずからに与える。ここから三島が、家庭内では才覚を発揮し実権者としてふるまう一方で報われない孤独な存在でもある戦後の女性のありようを「女中」を通して典型化しつつ、近代社会の問題を文学的に掘り下げる模索を続けていたのだと論じられる。

結章では、この論文の作業全体をふりかえりながら、三島文学において女性たちが優越と隷属、支配力と依存、主体性と抑圧状態の両義性を象徴する二面的存在として描かれていることを結論する。また研究の成果として、しばしば女性蔑視的な発言を繰り返していた三島が文学創作においてはその発言とはうらはらに女性を重要視し、女性像を通して戦後の日本における社会状況を批判的に分析していたことが主張される。最後に、今後の三島研究を切り拓く有効な観点として女性像分析のさらなる可能性が展望される。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、その特異な政治思想や男性を中心とするナルシスティックな美学の観点から捉えられる傾向が非常に強かった三島由紀夫の文学について、女性人物に注目するという斬新なアプローチ方法によって、新たな読解を試みたものである。

論文全体が、男性に比してなんらかの意味で卓越したり周囲の人々を翻弄する強さを備えた女性たちを注視する（あるいはそのような存在として作中の女性たちを読み直す）という一貫した姿勢によって支えられており、明快な議論が提示されている。第一章での諸短編の検討を通じてすでに、三島作品においては脆弱な面をもつ男性と過度に強烈な個性をもつ女性の対比がしばしばみられ、「怪物的」女性像が三島文学の一つの型をなしていることが明確化され、その後の章において長編小説や戯曲を通じても女性人物が三島文学の鍵となることが論証されている。本論文の作業によって、三島研究において女性人物への着目がきわめて重要で有効な着眼点になることが確認されたことは大きな学術的寄与である。

本論文の研究作業によって、三島作品について数多くの新たな発見がもたらされたことも高く評価できる。天皇制など政治的な議論や男性主人公の際立った個性をめぐる哲学的人間論がしばしば三島文学について展開されてきたが、この作家が執拗なまでに、夫と妻を中心とする家庭、すなわち「核家族」という現代的な人間関係のあり方を注視し続けたことを明らかにした点は意義深い。また男性も女性との人間関係のなかで相対化されていること、限界を伴うものの強烈な「主体性」を行動や意志のうで発揮するのは女性人物であること、その女性たちの「支配力」は一面において空しいものとして設定されているがゆえに女性が現代的葛藤のすぐれた担い手として作品内で形象化されていることが説得力をもって示されている。女性をめぐる問題に限って評論などでの三島の発言と文学作品での描かれ方が齟齬をみせることを指摘しえたのも大きな成果であろう。三島文学における女性の重要性は、『美德のよろめき』において三島自身の「自己改造」に向けた模索が女性主人公節子に託されているという大胆な立論と説得力をもったその裏付けによって、一層明確になった。時代錯誤的な設定と言わざるをえない老練な「女中」という登場人物の類型が三島文学においてもつ意味も、本論文によって初めて明らかにされ、三島と女性という豊饒な主題が三島研究の有意義なテーマになることを示したと言える。

ただしジェンダー論が蓄積してきた議論の参照が十分とは言えず、また全体的に作品読解に偏った面は本論文の弱点と言えるかもしれない。しかしながら三島文学を包括的に読み込み、そのうえで個別の作品について独創的かつ精緻な分析をおこなった本論文の研究は高い評価に値するものであり、その学術的意義はいささかも揺らぐことはない。

### 2 最終試験

平成 30 年 10 月 5 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。